

C-06-5

随意性の改善に伴い振戦が増加した1症例

¹木沢記念病院リハビリテーションセンター，²木沢記念病院中部療護センター
○丹羽志保¹，青木智子¹，吉池佳代²，和田哲也²，槇林優²，奥村歩²，篠田淳²

【はじめに】随意性が改善したにも関わらず，それに伴って振戦も増加し，動作遂行に支障を来たす症例は少なくない．そのため，随意性を引き出しながら，振戦の出現する関節部位やその運動方向，種類などに留意した振戦成分の抑制方法を模索することが重要である．そこで，今回我々は，随意性の改善とともに振戦が増加した症例に，装具や弾性包帯を用いることで振戦を軽減させ，実用的な操作獲得を試みたので報告する．【症例】遷延性意識障害を呈した27歳男性，受傷後13ヶ月，当センターへ転院．全身の低筋緊張，随意性低下，筋力低下，右頸部・右上肢に振戦を認めた．右上肢は指示に対し僅かな反応は可能だが合目的な運動は困難だった．【経過】前回の当学会で報告したPSBを用いた訓練法により，随意性は改善したが振戦も増加した．そのため，随意性の向上を日常生活に繋げることは困難だった．まず，手関節の掌背屈の振戦成分を抑制するために，カックアップスプリント(以下スプリント)を作成・使用した．その結果，手関節は背屈位で固定され，掌背屈の振戦は軽減した．しかし，前腕回内外・肘関節屈伸の振戦は増加した．そこで，更なる振戦の軽減を目的に弾性包帯を使用し，スプリントを覆うように，手関節から上腕の範囲で，肘関節を伸展位に固定した結果，右上肢全体の振戦が軽減した．その後，繰り返し訓練を実施し，動作の連続性が向上した．【まとめ】一部の振戦を抑制することで他部位の振戦が増強することがある．そのため，いくつかの施策を複合的に行なうことが振戦を改善し，動作遂行能力の獲得に繋がったと考えられた．